

コラム：リビングラボの国際的起源と日本国内での展開

○リビングラボの起源と国際的なムーブメント

リビングラボの概念は、2000 年代初頭にスウェーデンやフィンランドなどの北欧諸国で生まれました。特にフィンランドのエスボー市に位置するヘルシンキ工科大学（現アアルト大学）がハブとなり創発した「ICT（情報通信技術）を活用した市民参加型のイノベーションプロジェクト」が世界における本格的なリビングラボの魁として知られています。（ちなみにこのプロジェクトを契機に、エスボー市全体で、スタートアップや新たな製品・サービスを恒常的に生み出すオープンイノベーションのエコシステムが形成されるようになり、エスボー市は、現在では「ヨーロッパのイノベーション首都」と呼ばれままでになっています。）

このように北欧を中心にリビングラボの取組が勃興した背景には、企業がユーザーのニーズを踏まえずに、新たな商品やサービスを開発したところで、市場に受け入れられなくなったことへの反省から、1990年代に「ユーザー中心設計（UCD）」や「共創（co-creation）」の考え方を重視するオープンイノベーションの思想が、産・官・学の三方で広がったことに起因しています。

○日本におけるリビングラボ

日本ではリビングラボの取組について、2010 年代初頭から欧州の事例が紹介され始めましたが、当初は「自社製品の開発は、あくまで自社のみで」という、従来までの日本企業独特の文化が障壁となり、生活者を含む多様な主体とのオープンイノベーションによって新たな商品やサービスを創発するリビングラボの取組は、我が国では広く普及するには至りませんでした。

ところが2015 年の国連による SDGs 採択や2018 年の経済産業省による「デザイン経営宣言」（顧客を含む多様な他者とのイノベーションを通じて、企業の産業競争力の向上を図る）などが後押しとなり、大学研究機関が主導する形で、民間企業を中心に、国内でもリビングラボの取組が徐々に展開されるようになりました。

○横浜におけるリビングラボの起源

横浜市では1980 年代前半から市民参加・市民協働のまちづくりが活発に行われており、1990 年代に各区役所が中心になって実施された「横浜市パートナーシップ推進モデル事業」には、市民が主体となった横浜ならではのリビングラボの萌芽を見ることができます。また2000 年代前半になると NPO を中心とした「民との協働」が市政運営の柱となり、2000 年代以降の公民連携による様々な取組によって、横浜においてリビングラボが構築・実施される土壌が形成されたと言えます。